

4章 みどりの指針

《みどりの指針の役割と構成》

本計画では、基本理念「朝霞らしいみどりをみんなで育み暮らしに生かすまち」の実現に向け、市民・事業者・行政による様々な取組を位置づけ、みどりのチカラが上手に生かされたまちづくりが展開されることを目指しています。それらの取組を進めるにあたり、グリーンインフラへの理解が深まるよう、みどりに関する考え方や取組の方向性を示す「3つのみどりの指針」を定めます。

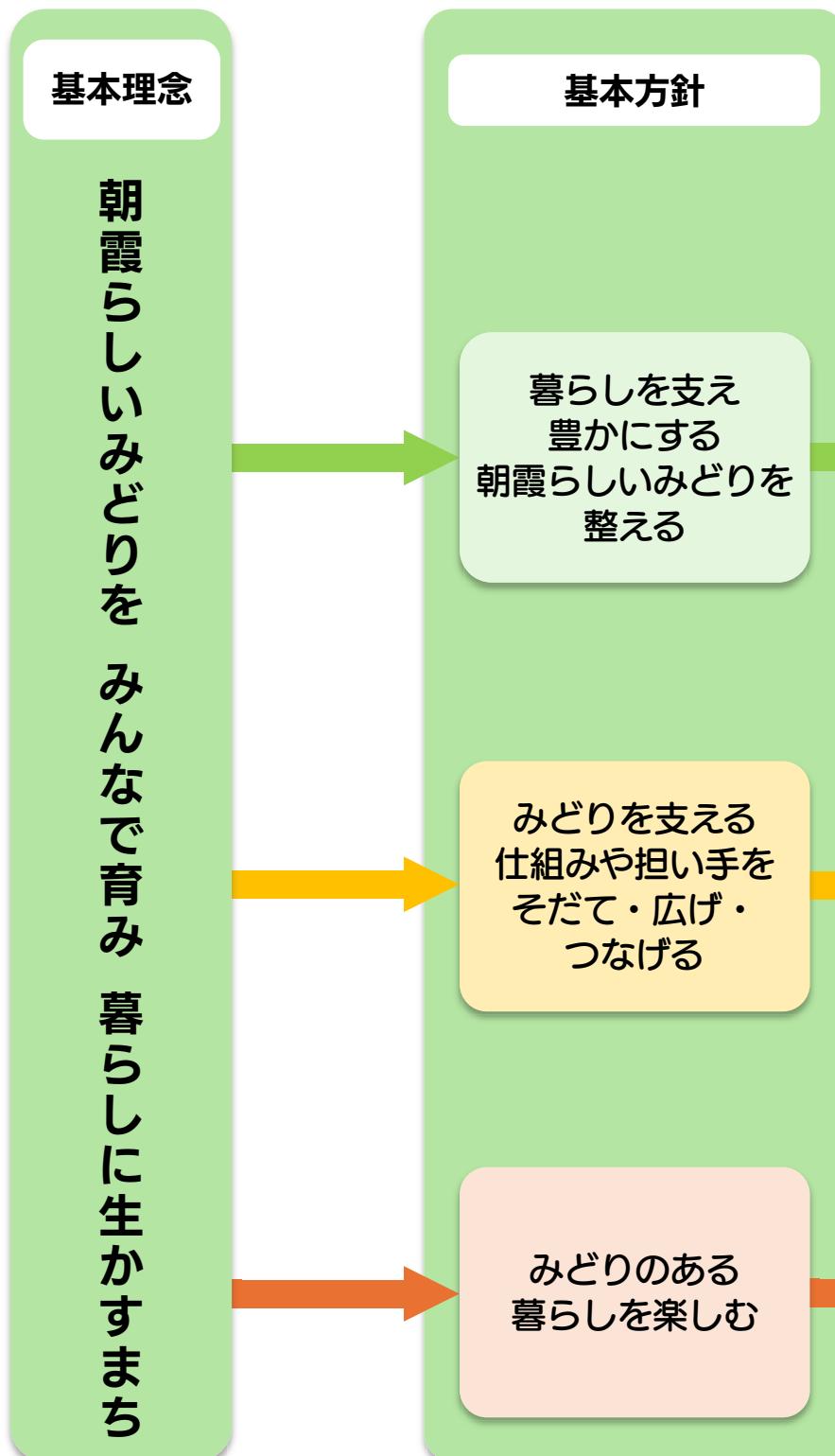


図 4-1 みどりの指針の構成

3つのみどりの指針

1. みどりのチカラを上手に生かす指針 (グリーンインフラ指針)

- 1) 健全な水循環を支えるみどり
- 2) 都市の気温上昇を緩和するみどり
- 3) 地球温暖化の緩和に貢献するみどり
- 4) 生き物の生息空間となるみどり
- 5) まちの景観・郷土の風景を形成するみどり
- 6) 暮らしに息づく農業活動の場となるみどり
- 7) 健康づくりの場となるみどり
- 8) 身近な遊び場となるみどり
- 9) にぎわいや交流の場となるみどり
- 10) 防災拠点となるみどり

2. みどりを支える仕組みの指針 (グリーンマネジメント指針)

3. あさかのみどりの魅力を楽しむ指針 (グリーンプロモーション指針)

みどりの取組・地域別の取組

(1) 健全な水循環を支えるみどり

基本的な考え方

- この指針は、まち全体が雨を優しく受け止める大きなスポンジになることを目指すものです。雨水をゆっくり地面に浸み込ませることで、地下水を蓄えながら、水害を防ぐ健やかな水の循環を育てます。
- 湧水につながる涵養起源²⁴を含めた台地全体で雨水を浸透させ、都市型水害を緩和させることが大切です。一方、低地は雨水を一時的にためておくるタンクのような役割を持っています。

取組の方向性

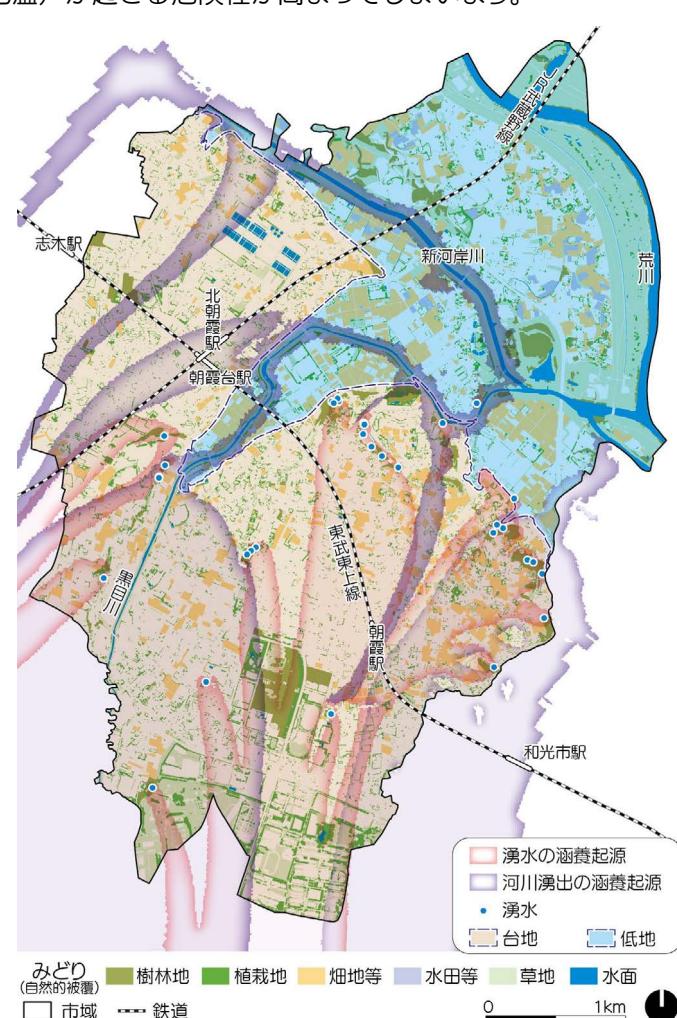
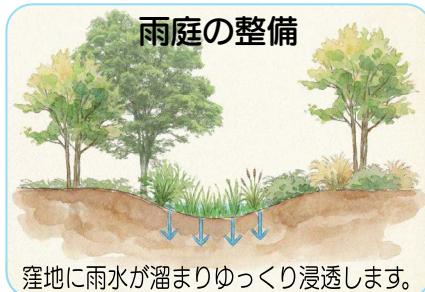


図 4-2 健全な水循環を支えるみどり

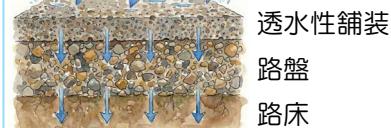
雨水を地下に浸透させる

都市化によって水が浸み込まなくなった地面を、本来の呼吸できる地面に戻していくことが大切です。



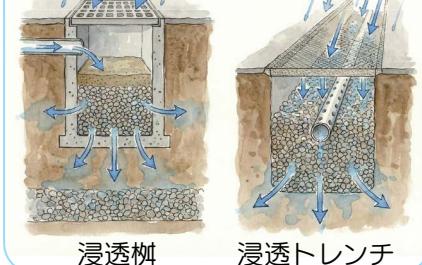
窪地に雨水が溜まりゆっくり浸透します。

透水性舗装の採用



透水性舗装
路盤
路床

浸透樹・浸透トレーンチの設置



浸透樹 浸透トレーンチ

雨水浸透貯留植栽基盤材

土の中に適度なすき間を作ることで、雨水をゆっくり浸み込ませることができます。このすき間は木の根が伸びる道にもなり、木が元気に育つだけでなく、根が盛り上がって地面を壊すのを防ぐことにもつながります。

24 涵養起源は降った雨が地下を通って特定の湧水へたどり着く「元となる場所」です。今回の調査では、降った雨（地下に浸透した雨）の1%以上がその湧水に届く範囲をシミュレーションで予測しています。

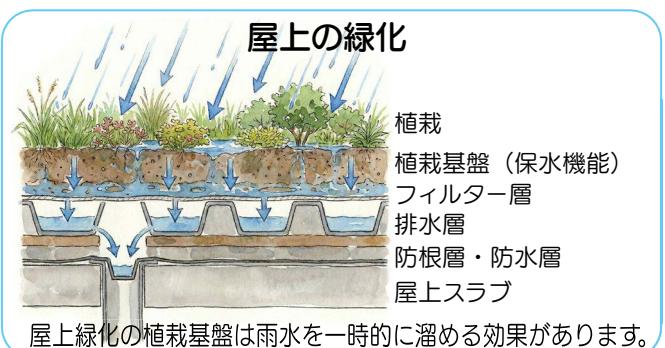
1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 雨水を地面に浸み込ませ、道路にあふれる水が減ることで下水道管への負担を軽くし、浸水被害を軽減します。
- また、大地が雨水を吸い込むことで地下水が豊富になります。すると、湧き水や川底から湧き出る水が安定し、雨が降らない日でも川の水量が保たれるようになります。川の水が増えれば水質もきれいになり、魚や水草が生きやすい環境が整います。

雨水を一時的に溜める

大雨が降ったとき、すべての水が一気に下水道や川へ流れ込まないように、一時的に水を溜める仕組みをつくり、洪水のピークを小さくすることを目指します。



雨水貯留槽の設置

雨水貯留碎石層の設置

調整池の整備

みどりを守る

水の循環を支えてきた大切なみどりを守り、その働きをさらに強めていきます。

雨水をゆっくり地面に落とし、雨水の流出を抑え地中への浸透を助けます。



住宅地や商業地等



樹林地や農地等の自然的な土地被覆



図 4-3 健全な水循環を支える取組

(2) 都市の気温上昇を緩和するみどり

基本的な考え方

- この指針は、ヒートアイランド現象（熱中症などの原因となる気温上昇）を緩和するため、植物と水が持つ自然の冷却効果を活かしたまちづくりを目指すものです。
- 木陰の涼しさや、植物が水蒸気を出すことで気温を下げる気化熱の働き、そして急激な温度上昇を抑える水の働きを活用するために、みどりを守り・育てることが大切です。

取組の方向性

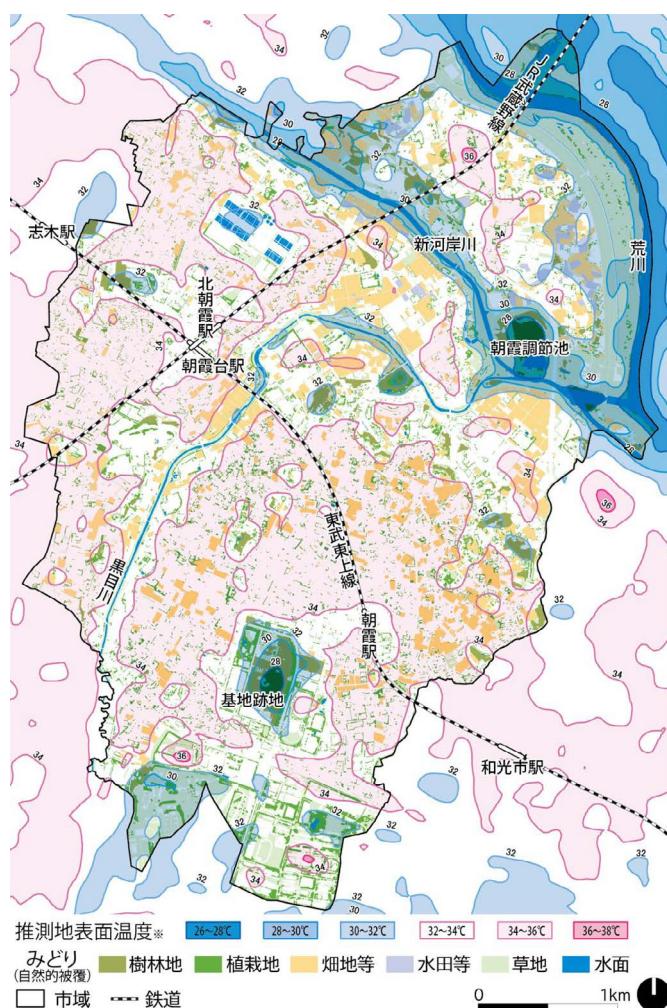


図 4-4 みどりとクールアイランドの分布

※人工衛星ランドサットによる画像より推測した地表面温度。

みどりを守る

都市の気温上昇を抑制するクールアイランドとなっている林や水辺を守ります。

みどりを増やす

植物を新しく植えることでみどりの絶対量を増やし、まち全体の温度が上がりすぎることを防ぎます。



1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 森や草木は、葉から水分を蒸発させることで空気を冷やします。また、茂った葉が日光を遮ることで、アスファルトや建物の表面温度が上がるのを和らげます。
- これにより、私たちが涼しく感じるだけでなく、エアコンの使用量が減り、室外機からの排熱を抑えることにもつながります。
- 川や田んぼなどの水辺は、温度変化が穏やかなため、周囲の急激な気温上昇を和らげる効果があります。

効果的に温度上昇を抑える

建物や地面に直射日光が当たらないように木を植えたり、熱くなりにくい舗装にすることで、温度の上昇を抑えます。

また、池や小川を作ったり、ミスト（霧）や打ち水をしたりすることで、水が蒸発するときに周りの熱を奪う「気化熱」を利用して涼しさを作ります。

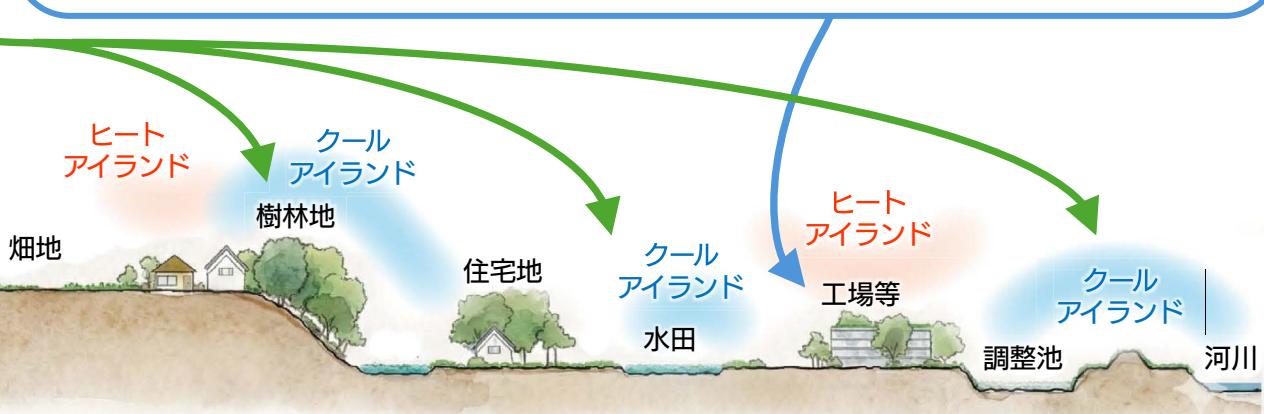
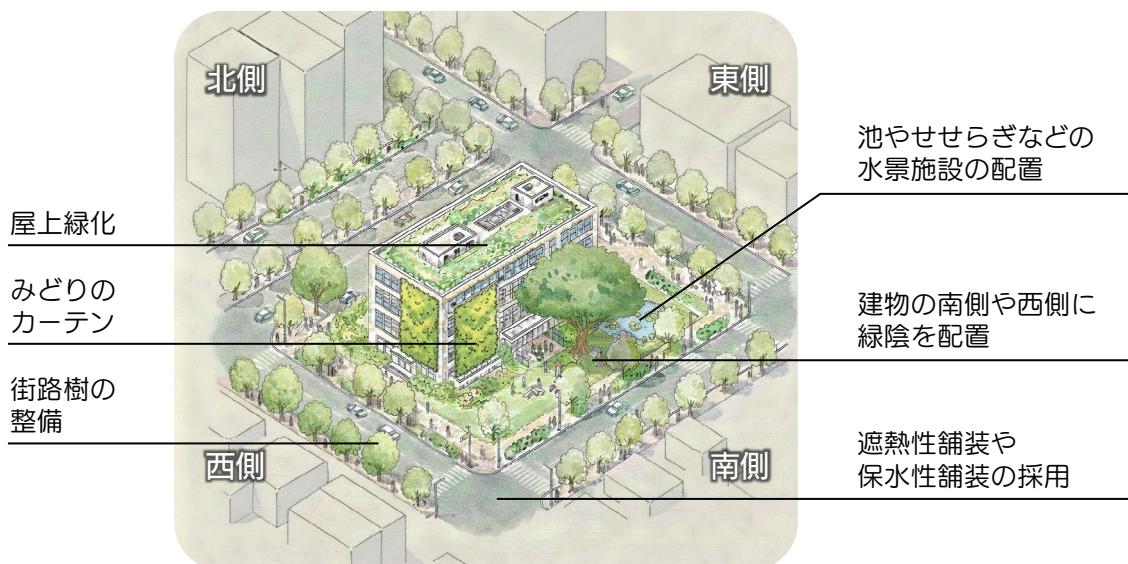


図 4-5 都市の気温上昇を緩和する取組

(3) 地球温暖化の緩和に貢献するみどり

基本的な考え方

- この指針は、二酸化炭素 (CO₂) を吸収してくれるみどりを守り・育てることで、地球温暖化を少しでも和らげることを目指すものです。
- みどりを増やすだけでなく、多様な方法で CO₂ を吸収・蓄積する「炭素固定」能力を高めることが大切です。

取組の方向性

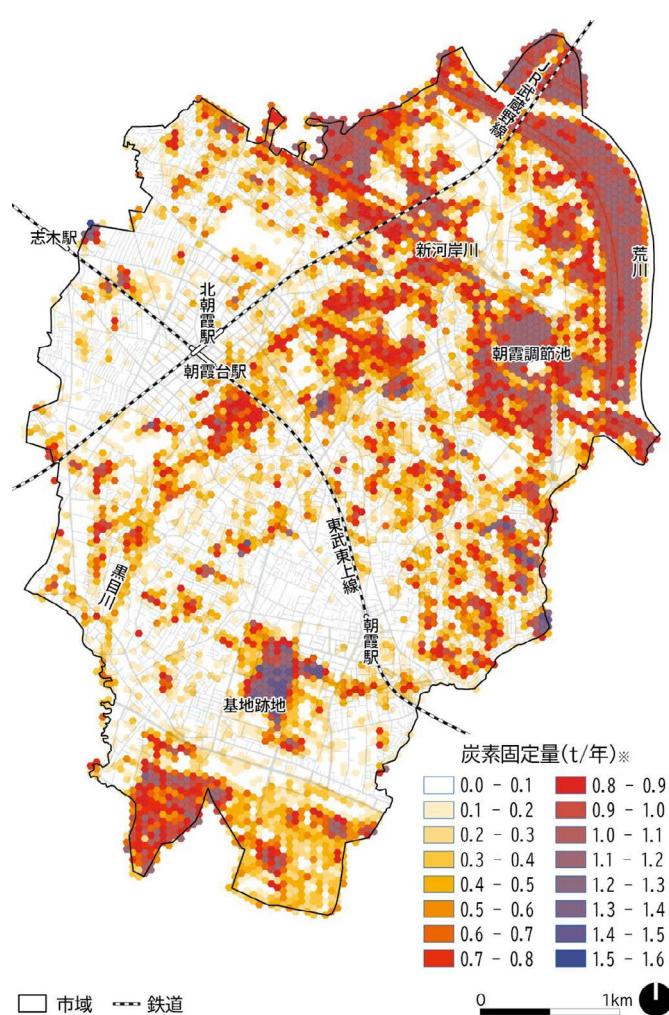


図 4-6 炭素固定量

※評価単位（面積：約 2150 m²）における炭素固定量。

炭素固定に係る直接的な取組

植物が光合成によって大気中の CO₂ を取り込み自身の体内に炭素として蓄積（炭素固定）すること

斜面林や公園の樹木、河川敷や基地跡地の草原、そして市内に残る農地は、CO₂ を吸収する大切な役割を果たしています。これらのみどりは、地球温暖化の緩和に欠かせない存在です。

炭素固定に係る間接的な取組

カーボンニュートラルを目指した様々な取組によってエネルギー消費を抑制し、結果として CO₂ 排出量を削減すること

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- まちの中で育まれるみどりは、CO₂を吸収する都市の肺のような役割を果たし、地球の未来を守る土台となります。
- また、みどりが増えればまちが涼しくなり、エアコンなどのエネルギー消費も減るため、私たちの暮らしがより持続可能なものになります。

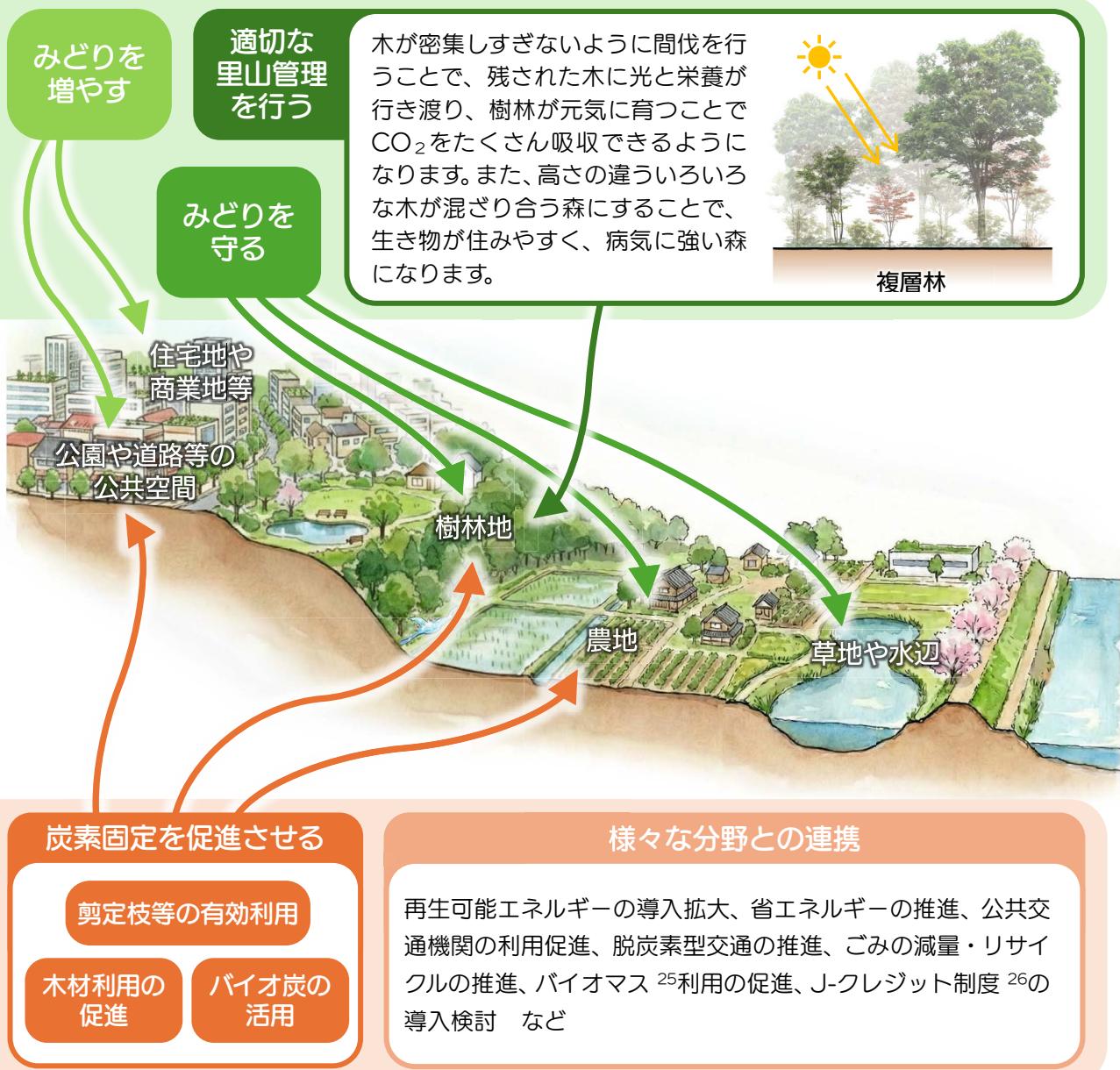


図 4-7 地球温暖化の緩和に貢献する取組

25 植物や生ごみなど、生物から生まれた資源のこと。CO₂を増やさない、環境に優しいエネルギー源です。

26 J-クレジット制度は森林整備や省エネ設備の導入によるCO₂の削減量を、国が「価値」として認める制度です。この削減量は企業などが買い取ることができ、社会全体で温暖化対策を進めるための仕組みとして注目されています。

(4) 生き物の生息空間となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、朝霞の自然を未来へつなぎ、人と生き物たちが共に暮らす持続可能なまちを目指すものです。
- エコロジカルネットワークの考え方に基づき、離れているみどりとみどりをつなぎ、質を高めることで、地域の生態系を豊かにし、人間にとっても住みよい環境を育むことが大切です。

市内の生き物調査では、樹林地や水辺、特に朝霞調節池や墓地跡地、斜面林などで、多種多様な生き物が見つかっています。これらは生き物たちの重要な生息地として守る必要があります。また、黒目川や新河岸川、農地、小さな緑地も、生き物の移動経路として重要です。一方で、住宅地などの市街地では、生き物が住んだり移動したりしやすいように、みどりや水辺を増やしていく工夫が必要です。

取組の方向性

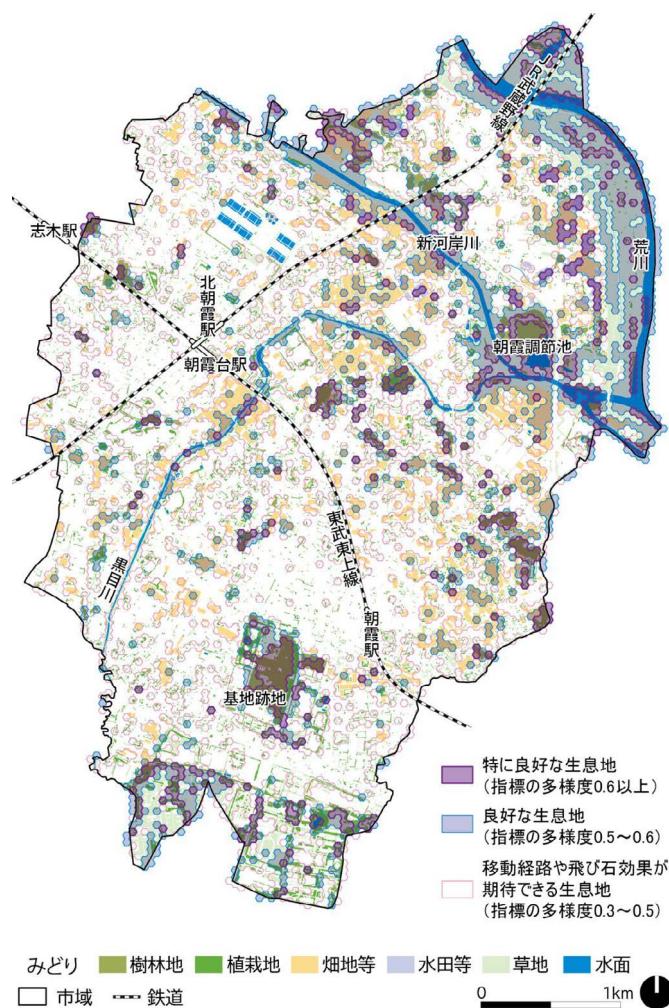


図 4-8 良好的な生物生息地の分布

※指標の多様度は、全 34 指標に占める出現指標数の割合です。

※指標の多様度に基づく評価であり、対象外に配慮すべき既存生息地がある場合があります。

郷土の生き物が暮らせるよう
それぞれの場所に合わせた
方法で自然を守る

森の手入れをすることで生き物の生活の土台となり、農業を支えることで残された田畠が生き物のすみかや休憩場所になります。また、草刈り頻度を見直すなどして草地の多様な環境をつくり、水辺では外来種の防除に努めることで本来の自然な姿を取り戻すことに繋げます。さらに、湧き水や雨が土に浸み込む場所もきれいに保ち、地域全体の豊かな生態系を未来へつなげます。

生き物が暮らせる 場所を増やす

これまで生き物が生息できなかつた場所に新たなみどりの空間を生み出だすことで、昆虫、鳥類、小動物など、様々な生き物にとっての餌場、休息地、繁殖場所として役立ちます。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

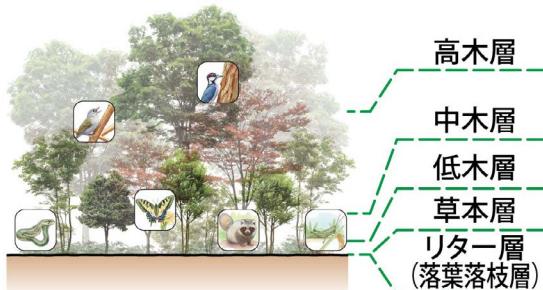
期待される効果

- みどりを守り増やすことは、生き物たちの「すみか」を確保することです。また、飛び地のように離れてしまった自然をみどりの道でつなぐことで、生き物が行き来できるようになります。地域の生態系が安定します。
- その土地本来の植物を植えたり、森を適切に手入れしたりすることで、朝霞の気候に合った生き物が増え、それらをエサとする昆虫や鳥たちが戻ってくることで生物多様性が向上します。

（エコロジカルネットワークの形成）
生息環境をつなげる



立体的なみどりをつくる



生息環境の質を高める

背の高い木、低い木、そして足元の草花。これらをうまく組み合わせることで、生き物たちにとって快適なすみかが生まれます。高い木は鳥たちの巣に、低い木は隠れ家に、草花は虫たちのご飯になります。いろいろな高さの植物を植えることで、生き物のにぎわいが生まれます。

異なる自然の境界をつくる



林の縁（へり）や水辺など、異なる環境が接する場所（エコトーン）をあえて作ることも大切です。環境が少しづつ変化するこうした場所は、多様な生き物にとって住み心地の良い貴重な生息地となります。

朝霞本来の生き物を大切にする

朝霞ならではの自然を未来へつなぐため、地域本来の在来種²⁷を選んで植えていきます。同時に、生態系を脅かす外来種は「入れない・捨てない・広げない」を徹底します。特に黒目川や斜面林などの大切な場所では、市民の皆さんと協力して外来種の防除に取り組み、本来の豊かな自然環境の再生を目指します。

27 在来種とは、昔からその地域に自然に住んでいる生き物です。対して、人間が他の地域から持ち込んだものを外来種と呼びます。外来種が勢力を広げると、在来種の住みかや食べ物を奪い、生態系を壊す原因になります。

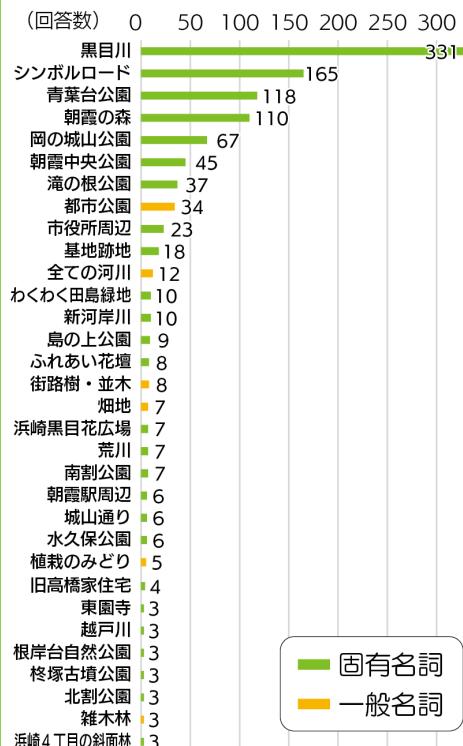
(5) まちの景観・郷土の風景を形成するみどり

基本的な考え方

- この指針は、まちの景観をつくっている朝霞らしいみどりを守り育て、その魅力を未来へ引き継ぐことを目指すものです。
- 特に、黒目川や朝霞の森周辺のみどりは朝霞のシンボルであり、自然と触れ合える貴重な場所です。また、武蔵野の面影を残す斜面林や農地の風景も、失われないように守ることが大切です。

取組の方向性

本市における景観資源の評価では、市民が「豊かである」・「魅力的である」と感じる景観要素を市民アンケート調査により抽出し、その回答頻度をもとに評価を行いました。



※回答数2以下は省略しています。

市民アンケート調査による
「豊か・魅力的と感じるみどり」の回答数

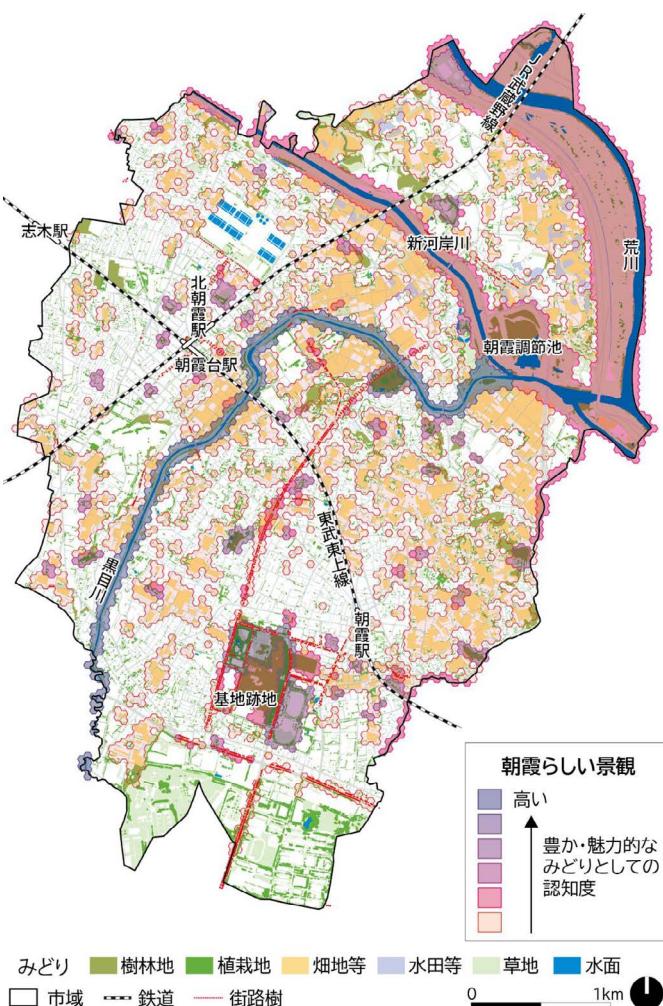


図 4-10 市民アンケート調査に基づく景観資源の分布

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- これらの取組により、朝霞らしいみどりが守られ、四季折々の美しい風景がまちを彩ります。
- 豊かなみどりの風景は、見る人の心を癒やし、健康づくりにも役立ちます。さらに、魅力的な風景の中に人が集まることで交流が生まれ、にぎわいの創出にもつながります。

朝霞らしい景観を守る

墓地跡地の みどりの保全	墓地跡地に残るみどりは、地域の歴史を伝える景観として残すべきものです。	河川環境の 保全	黒目川などの河川の自然環境を守ることで、市民の憩いの場としての価値が高まります。
斜面林の 保全	武蔵野の面影を残す斜面林を、特別緑地保全地区制度などを通じて守る必要があります。	桜並木の 保全	重要な景観資源である桜並木は、適切な手入れや計画的な植え替えが大切です。
大きな木の 保全	専門家による診断や補助制度が、地域のシンボルとなるような大きな木を守ります。	農地の 保全	都市の貴重な農地を守ることが、季節の移ろいを感じられる田園風景の維持につながります。

潤いのある景観をつくる

都市公園の 整備	四季を通じて楽しめるみどり豊かに整備された公園は、地域の景観の拠点として魅力が高まります。	街路樹の 整備	都市計画道路などに街路樹を植えると、みどり豊かで美しいまちになります。
公共施設の 緑化	市役所や学校等の公共施設で緑化を進めることができ、地域の景観向上に貢献します。	民有地の 緑化促進	様々な補助制度が、市民や事業者が行う自宅や事業所敷地の緑化活動を支援します。
屋上・壁面の緑化	建物の屋上や壁面を緑化し、限られたスペースでもみどりを増やすことが、景観向上を促進します。		

癒しやにぎわいをもたらす景観を育てる

市民との協働 による管理	市民や企業がみどりの維持管理に参加する仕組みができると、協働による維持管理体制が充実します。	散策路の 回遊性の 向上	点在する公園や緑地をつなぎ、散策などが楽しめる「みどりの回廊」が整備されると、まち全体の魅力が向上します。
みどりの 専門家 による支援	樹木医などの専門家の招へいによる講習会や現場指導の機会があると、質の高い樹木管理や景観形成に関するアドバイスを受けられます。	みどりの 地域イベント の推進	桜祭りやウォーキングなど、四季折々のみどりの魅力を活かしたイベントは、市民が自然に親しむ機会となり、地域の活性化にもつながります。

図 4-11 朝霞らしい美しい景観をつくる取組

(6) 暮らしに息づく農業活動の場となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、私たちの暮らしを支え、豊かにしてくれる身近な農業を守り育てることを目指すものです。
- 農家が農業を続けやすいように支援するとともに、農業体験や地産地消（地元で採れたものを地元で食べること）を進め、防災や環境保全といった農地の役割についても理解を深めることが大切です。

取組の方向性

朝霞市では都市化が進み、農地が急速に減っています。過去 20 年間で東京ドーム約 17 個分（約 8,000 アール）もの農地が失われ、住宅地などに変わりました。農家の高齢化や後継者不足が主な原因ですが、手入れされずに荒れてしまう農地が増えていることも問題です。農地の減少は、単に農作物が作れなくなるだけでなく、防災機能や自然環境が失われることを意味し、まちの持続可能性に係る大きな課題です。

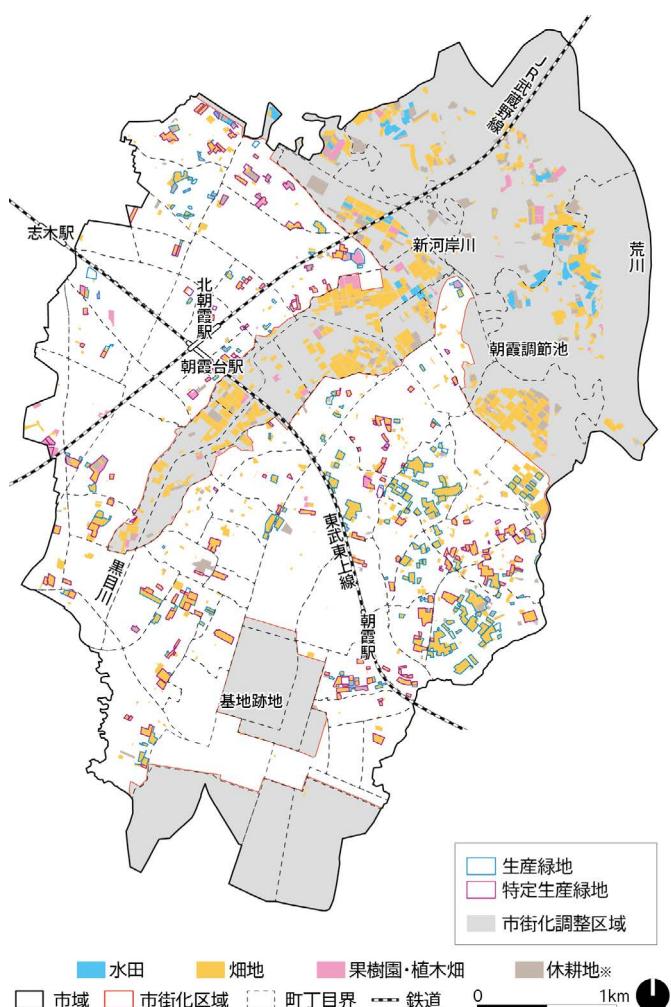


図 4-12 農地及び生産緑地等の分布

※休耕地は空中写真による目視判読のため実際と異なる場合があります。

都市農地を守る

農地は、新鮮な野菜を作るだけでなく、「災害時の避難場所」「生き物のすみか」「美しい景観」「交流の場」といった、たくさんの大切な役割（多面的機能）を持っています。これらを保全し、次世代へつないでいくことを目指します。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 農業を続けやすい環境を整えることで、農地が将来にわたって残ります。また、市民農園や直売所での交流を通じて、地元の野菜を食べる習慣が広がり、都市農業が長く続くようになります。
- 農地が残ることで、雨水を一時的に貯めたり、生き物のすみかになったりと、都市の環境を守る力が向上し、豊かで災害に強いまちづくりにつながります。

農業を続けられる環境づくり

農業の担い手を育てる

農業を支えるリーダーや、次世代を担う後継者の活動を積極的に応援することが、朝霞の農業が続いていくために必要です。

生産緑地・特定生産緑地制度の運用

まちの中にある農地を「生産緑地」に指定することで、みどり豊かな都市環境と、農業のある風景を守ります。



使われていない農地（遊休農地）の活用

「農業をやりたい」という意欲のある人や、新しく農業を始めたい人に貸しやすくする仕組みが充実すると、使われていない農地が減ります。また、農地が見守られるようパトロールをすることは、ルールに反した使い方を防ぎます。

体験と学習を通じた「食」への理解

教育現場での農業体験

学校教育などの場で、こどもたちが土に触れたり野菜を育てたりする体験が増えることで、自然とのふれあいを通して食べ物や農業への理解が深まり、豊かな心が育まれます。



食育の推進

「食」についての正しい知識持ち、「食」を選択し、健全な食生活を実践するチカラを育むことが大切です。それが、農業の大切さを学ぶことにもつながります。

参加と交流で広がる地産地消の輪

市民農園の利用

誰でも気軽に野菜や花を育てることができる市民農園は、多くの方が農業の体験をするきっかけになります。

農を通じた交流

農業祭などのイベントは農家の人と市民が交流できる場として地域を元気にするとともに、農業をもっと身近に感じるきっかけになります。

地場産野菜の購入

浜崎農業交流センターの農産物直売所や、市役所で開催される「あさか新鮮野菜市」などは、朝霞で採れた新鮮な野菜を買うきっかけになります。地元で作られたものを地元で食べる「地産地消」を進めることは、朝霞の農業を応援し、安全・安心な食生活の広がりをもたらします。



図 4-13 都市農地の保全に役立つ取組

(7) 健康づくりの場となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、みどり豊かな遊歩道や公園を、私たちの健康を支える健康資産²⁸と考え、より健康になれるまちを目指すものです。
- 歩道が途切れた区間の接続や木陰の創出により歩きやすくし、まち全体の健康資産を充実させることが大切です。また、健康遊具や、植物で心を癒やす園芸療法を取り入れ、多様な健康づくりができる場を増やすことも大切です。

取組の方向性

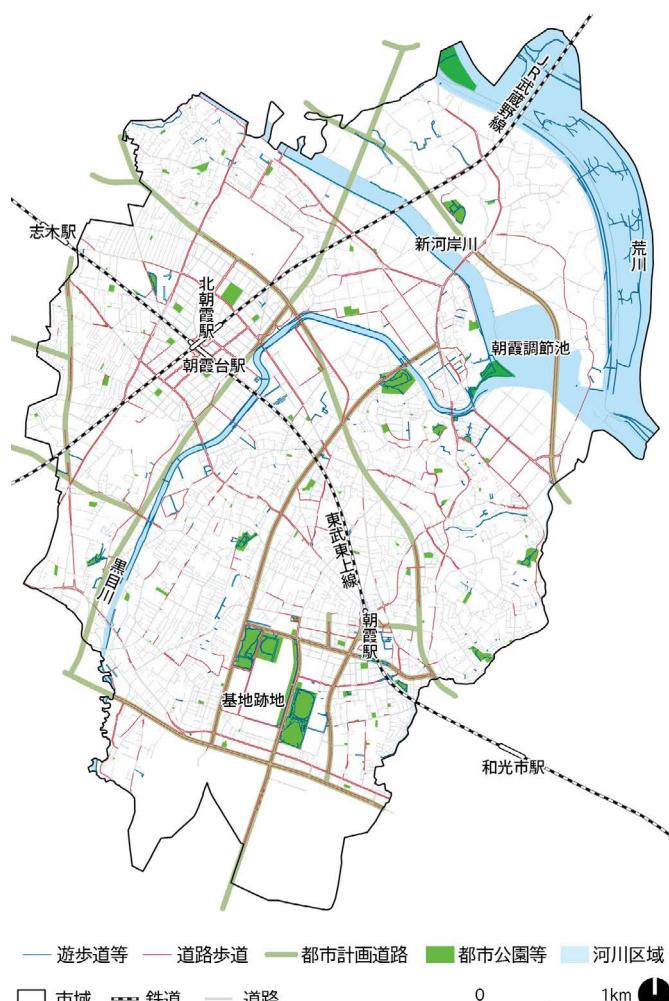


図 4-14 歩行空間の分布

歩道をつなげる

歩道の連続性を確保することが大切です。また、川沿いの遊歩道などで車と人が交差する場所を改善すると、安心して歩けるようになります。



みどり豊かな歩道空間

健康イベントへの参加を促す

公園や遊歩道を活用した健康イベントは、地域のみなさんが気軽に参加できる良い機会です。



駅からハイキング
(くろめ文化コース)

28 健康資産は、医療サービスを指すことが一般的でしたが、近年、公衆衛生やまちづくりの分野では、「人々の健康を維持・増進するために活用できる地域にあるすべての要素」というより広い意味で捉える考え方が主流になっています。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- みどり豊かな歩道や健康遊具などの健康資産がまちの中に増えることで、市民のみなさんが自然と体を動かすようになり、健康になることが期待されます。
- こうした健康資産を活用したイベントやプログラムによって、楽しみながら健康づくりができることが期待されます。

まちの中の健康資産を充実させる

人にやさしい機能をつくる

木陰、照明、ベンチ、案内板などが整備され、バリアフリー化も進むと、歩くことでリラックスできる心地よい空間が生まれます。



黒目川さくらテラス

健康づくりに役立つ公園にする

足腰を鍛えるコースや植物で癒やされる場所など、公園の施設の充実が健康づくりに役立ちます。幅広い世代が使える健康遊具を足りない地域へ設置したり、古くなったものを直したりすることも大切です。



健康遊具
黒目川水道橋付近の
ポケットパーク



レイズドベッド花壇
(まぼりひがし公園)

みどりを生かした健康プログラムを充実させる

ウォーキングマップの充実

市内のおすすめ散策ルートやどこに健康遊具があるかをわかりやすくまとめた「くろめがわグリーントレールマップ」の内容をさらに充実させることができます。健康づくりにつながります。



くろめがわグリーントレールマップ

図 4-15 みどりに係る健康資産の充実のための取組

（8）身近な遊び場となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、朝霞市のどこに住んでいても、だれもが安全で魅力的な遊び場に行けることを目指すものです。
- 市内には公園が少ない地域があり、住む場所によって遊び場の環境に偏りがあります。しかし、朝霞市には川、神社やお寺の境内、畠などの豊かな自然がたくさんあります。都市公園に加えて、これらをうまく活用し、みんなが平等に楽しく遊べる環境をつくることが大切です。

公園が足りない地域が問題になっている一方で、市内には川や樹林地、農地などの自然が豊富です。これからは公園だけでなく、こうした身近な場所も含めて、誰もが安全に楽しく遊べる環境をつくることが求められます。

取組の方向性

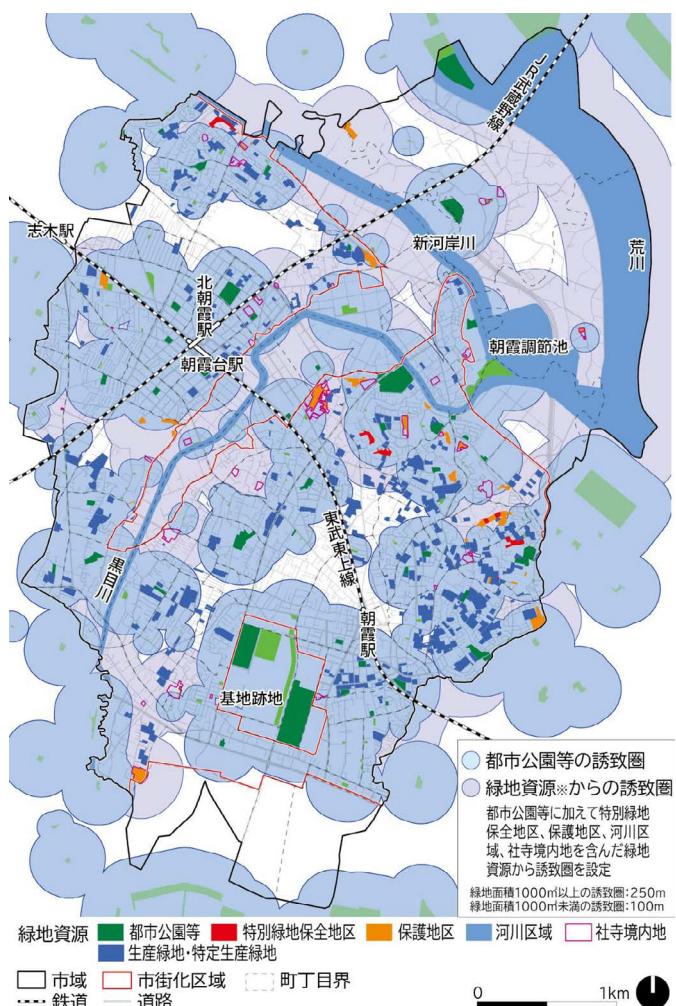


図 4-16 緑地資源の活用における公園不足域の検証

※緑地資源からの誘致圏表示には、生産緑地・特定生産緑地は除外しています。

今あるみどりを活かして 遊び場をつくる

川沿いのスペースを遊び場にする

黒目川などの川沿いは、多くの市民に親しまれています。ここにさらに水辺に近づけるエリアや遊具、ピクニックができる場所などをつくると、大きな「遊び場」として活用することができます。



わくわく田島緑地

神社やお寺、林を遊び場にする

地域の人に親しまれている神社やお寺の境内、雑木林などでは、こどもたちが安全に遊べる場所や機会をつくることができます。これは所有者の了承を得る必要があります。

「遊びマップ」をつくって紹介する

公園だけでなく、川や緑地など、市内のあちこちにある「実は遊べる場所」の特徴や、どんな遊びができるかを紹介する地図「あそびマップ」を作成することで、今まで知らなかつた遊び場を発見したり、利用したりするきっかけになります。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 新しい公園をつくることに加え、今ある自然やみどりなどの「資産（ストック）」を遊び場として活用することで、公園が少ない地域が減り、どこに住んでいても身近な遊び場に行けるようになります。
- また、川の水辺や神社、畠といった自然の中で遊ぶことは、こどもたちが自然とふれあい、豊かな感性を育てる貴重な機会になります。

身近な公園を充実させる

公園が足りない地域をなくす

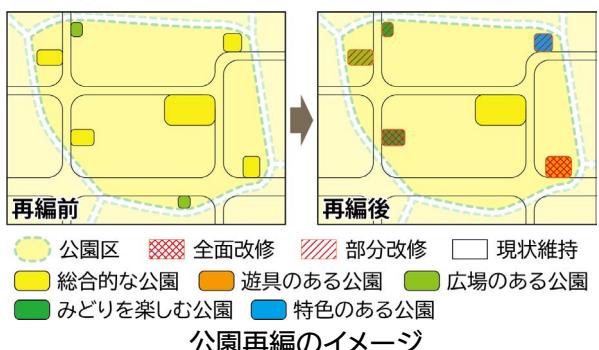
公園が遠くて遊び場に行きにくい地域において、新しい公園をつくることを検討する必要があります。また、人が多く住んでいるのに公園が狭い地域では、今ある公園を広げたり、使われていない土地を活用したりすることを検討する必要があります。建物の屋上などを利用する工夫を取り入れるなどして、人口に見合った広さの遊び場を確保することが大切です。



公園不足域に整備されたみやど公園

公園を直し、役割を見直す

古い公園や利用者のニーズに合わなくなった公園のリニューアルを検討する必要があります。また、一つの公園すべてをまかぬのではなく、地域にあるいくつかの公園をグループとして考え、「ボール遊びができる公園」「自然観察ができる公園」など、それぞれの公園が違う役割を持つことで、いろいろな遊びができるように再編することが求められます。遊具や施設の管理も計画的に行い、長く使い続けられるようになりますことも大切です。



市民みんなで遊び場をつくり、育てる

みんなの声を公園づくりに生かす

公園や遊び場を計画・設計する段階から、こどもたち自身や保護者、地域の人たちが参加できるワークショップなどを開くことで、実際に使う人たちの「こんな場所がほしい」という声を、直接形にすることができます。

公園を支えるサポーターを増やす

地域の人たちが、公園の掃除や花壇の手入れに参加できる機会をつくることが、自分たちの遊び場としての愛着を育みます。また、地域の団体が遊びのイベントを企画・運営することを支援すると、遊び場がより活発に使われることが考えられます。



図 4-17 身近な遊び場の充実に係る取組

(9) にぎわいや交流の場となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、市内にあるみどりの空間を使って、みんなが集まり、交流できる場所をつくることを目指すものです。
- 公園や緑地、広場など、身近な場所をもっと使いやすくすることで、そこで遊んだりイベントを楽しんだりする人を増やします。そうすることで、地域の人同士のつながりを深め、まち全体を元気にすることが大切です。



取組の方向性

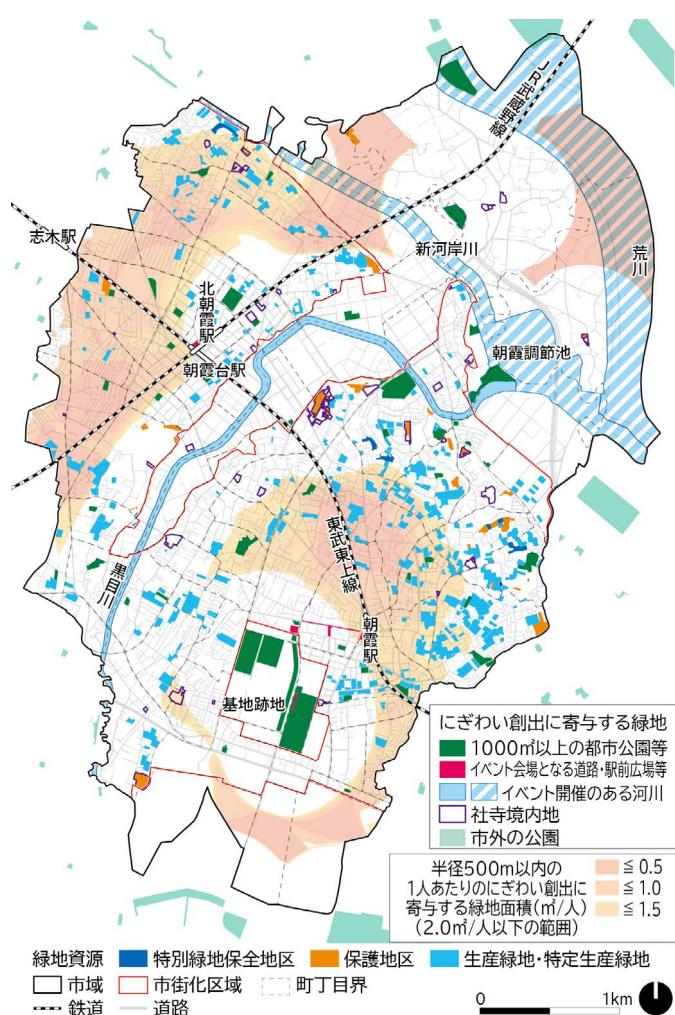


図 4-18 にぎわい創出に寄与する緑地等の分布

みんなでつくるにぎわいの場

キッチンカーで みどりの空間をにぎわいの場に

シンボルロードを中心に、市内のオープンスペースへキッチンカーが出店しやすい仕組みづくりが求められます。



イベント開催をサポート

彩夏祭のような大きなお祭りだけでなく、市民や商店街による小さなマルシェなどが開催されると、日常的にぎわいが生まれます。それには、開催しやすい環境や手続き方法にすることなどが大切です。



農家と市民をつなぐ

畠や直売所を収穫体験などの場として活用することで、農家と市民の交流が深まります。また、広場などで野菜マルシェ（市場）を開くことは、地元野菜に親しむ機会になります。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 身近なみどりの空間でイベントや交流が増えることで、こどもからお年寄りまで、世代を超えた新しいつながりが生まれます。水辺や畠など、朝霞ならではの場所で遊んだり学んだりすることは、心を豊かにしてくれます。
- こうした体験を通じて、朝霞への愛着や、もっといいまちにしたいという気持ちが育まれ、みんなで協力したまちづくりが盛んになることで、未来につながる活気が生まれることが期待されます。

みどりを生かした交流の場づくり

いつもの場所をもっと楽しく

公園や神社の境内などで開催するイベントやお祭りがにぎわいの中心となり、交流が生まれます。その他の取組として、屋外カフェを開いたり、キッチンカーが来たりしやすい環境を整えることも考えられます。



水辺の魅力を高めてもっと使いやすく

黒目川沿いの桜並木などに休憩スペースを整備することで、毎日訪れたくなるような親しみやすく魅力的な水辺空間に変わります。また、荒川の広々とした河川敷は、まちの貴重な自然です。この広い場所は、自然体験やレクリエーションの場として活用できる可能性を持っています。



里山で学び、楽しむ体験

特別緑地保全地区等の里山を守る活動の一環として、森の手入れを学びながら楽しむイベントなどを開催すると、自然と触れ合いながら、みどりの大切さを感じる機会になります。



道路や駅前をイベント会場に

「ASAKA STREET TERRACE」などの実績を活かし、道路や駅前広場をイベント会場として活用すると、まち全体でにぎわいと交流が生まれます。



図 4-19 みどりに係るにぎわいや交流の場となる取組

(10) 防災拠点となるみどり

基本的な考え方

- この指針は、身近な公園を充実させることで、災害時に誰もが安心して避難できる場所を確保し、災害に強いまちづくりを目指すものです。
- 今あるみどりを単なる自然としてだけでなく、防災力を高めるための大切な財産として捉え直し、安全なまちづくりに役立てることが大切です。

災害が起きたときに避難できる公園等の空地の分布を調べた結果、人口が集中する地域等において、一時的に避難できる都市公園や学校などの広い空地が不足していることがわかりました。

取組の方向性

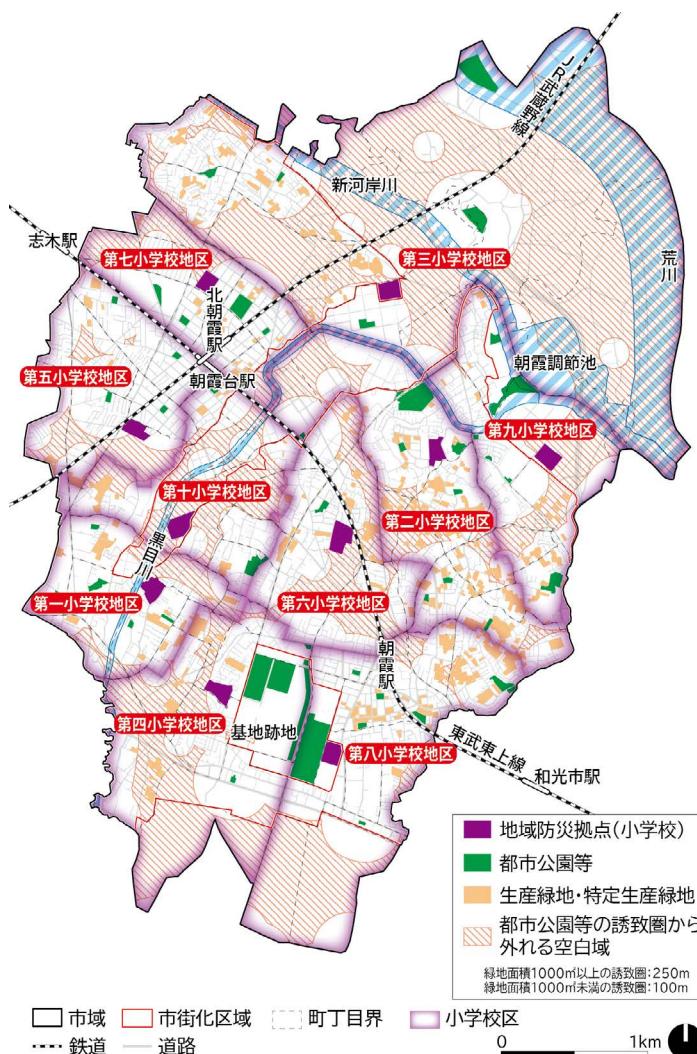


図 4-20 防災拠点となる緑地の分布

公園が不足する地域に公園整備を検討する

人口が集中している以下の地域において、古い公園を使いややすく再整備したり、防災機能を備えた新しい公園や広場を確保したりすることが求められます。（対象地域：宮戸、朝志ヶ丘、三原、溝沼、膝折町の一部、本町、仲町、根岸台南部、栄町東部）



みどりの財産（ストック）を活用する

公園を使った自治会・町内会の防災訓練などをサポートすることが大切です。また、都市にある農地は、災害時に一時的な避難場所になったり、火災が広がるのを防いだりする大きな役割を持っています。そのため、農地を生産緑地として指定する際に、災害時に協力してもらえるようお願いして、防災に役立つ農地を増やすことも大切です。

1 みどりのチカラを上手に生かす指針（グリーンインフラ指針）

期待される効果

- 身近な公園や大きな公園が整備されることで、いざという時の避難体制が強化されます。
- みどりが維持されることで、避難場所の確保や火災の延焼防止など、災害時に命を守る大きな役割を果たします。
- 公園が防災訓練や地域の交流の場として使われることで、近所の人同士のつながりが強まり、結果として地域全体の防災力が高まります。

(みやど公園)

公園の防災機能を高める

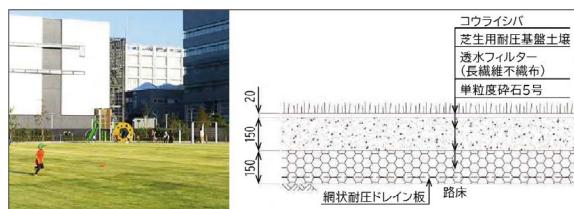
普段は遊び場や交流の場として親しまれている公園を、災害時には一時的な避難場所や、地域の人たちが集まって助け合う拠点として、最大限に活用する必要があります。また、公園を新しく整備・改修する際には、かまどベンチ（炊き出しができるベンチ）やマンホールトイレ（災害用トイレ）など、防災に役立つ設備導入を検討することが必須です。

市内公園の防災施設の設置例



その他の防災施設の例

今後の公園の整備では、まち全体の防災計画と連動した防災機能の充実を検討します。



重量車両対応機能と雨水貯留機能を併せ持つ芝生用耐圧基盤土壤を使用した芝生広場では災害時のいろいろな活動に対応できます。

屋根付きの空間は、災害時において救援活動スペースや救援物資の荷捌きスペースとして活用することができます。

事例引用：防災公園街区整備事業を活用したまちづくりパンフレット（独立行政法人都市再生機構）

図 4-21 防災拠点の充実につながる取組

2 みどりを支える仕組みの指針 (グリーンマネジメント指針)

本市には、先人から受け継がれた朝霞らしいみどり、そのみどりを守り育てる市民と培ってきたノウハウという大切なみどりの財産があります。

この指針は、このみどりの財産を未来へ育み、多様な人々が連携してその価値を最大限に生かすための考え方を示しています。4つの柱で構成されており、それがバランス良く機能することで持続可能なみどりのまちづくりを目指します。

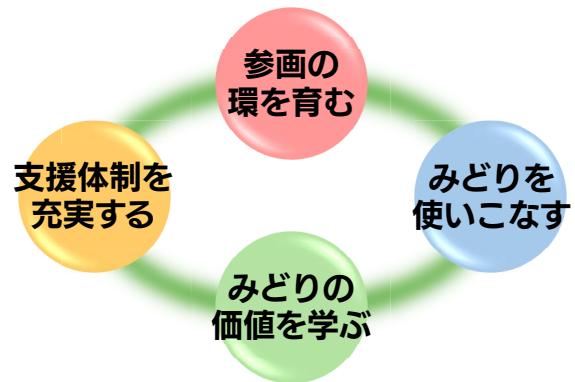


図 4-22 みどりを支える4つの仕組み

参画の環を育む

こどもから大人まで、誰もがみどりに係る機会を増やし、楽しみながら参画できる場を充実させることが大切です。

みどりの担い手の育成と裾野拡大

自然の中で遊べるプレーパークやみどりの知識を学ぶ講習会などを通じて、新たなみどりの担い手が育ちます。



プレーパークの風景



里山管理の勉強会

担い手間のネットワーク構築と協働促進

活動したい市民や団体とみどりの場所や企業などを結びつける仕組みを作り、交流を活発にすることで、市民、団体、企業、行政が協力し合う大きな参画の環が広がります。

支援体制を充実する

市民や企業のみどり活動を安定して支えるため、支援体制を充実させることが大切です。

持続的なみどりのまちづくり

多様な財源の確保と運用の強化

国や県の補助金、ふるさと納税、クラウドファンディング、ネーミングライツ³⁰など、様々な方法で財源を確保し、有効活用することが考えられます。また、民間の地域貢献事業を促進する仕組みやPark-PFIなど民間の経営ノウハウの採用を今後検討する必要があります。

多様な主体の連携

市の関係部署が協力し合うことや、市民・企業・行政が連携するプラットフォームを充実させることは、まち全体でみどりを支える体制づくりにつながります。

DX²⁹の活用

公園の管理や情報発信にデジタル技術を導入すると、効率的にサービスを提供できます。



QRコード付きの解説版

29 DX (デジタルトランスフォーメーション) はデジタル技術を使って生活や社会をより良く変えることです。公園では、データ活用による効率的な管理やスマホでの予約など、最新技術で利便性や満足度を高める取り組みが挙げられます。

30 ネーミングライツは公園や体育館等の施設に、企業名などを冠した愛称を付ける権利のことです。企業は宣伝ができ、市は得られた契約料を施設の維持管理や運営に役立てることができます。

みどりを使いこなす

みどりの空間を単に保全する場所から市民が「主体的に使いこなす」場所へと転換させることが大切です。

協働の管理と魅力向上

公園やオープンスペースを行政が管理するだけでなく、市民や地域の活動団体が主体的に関わることで、より魅力的な空間として育つ仕組みが構築されます。市民協働による朝霞の森の管理運営のように、仕組みの構築によって利用者の視点に立ったきめ細やかな管理が可能となります。



体験と発見がある遊び

多様なニーズに対応するみどりの柔軟な活用

公園ごとの利用ルールを地域の実情に合わせて検討し、柔軟な運用を可能にすることで、多様なニーズに対応する環境が生まれます。

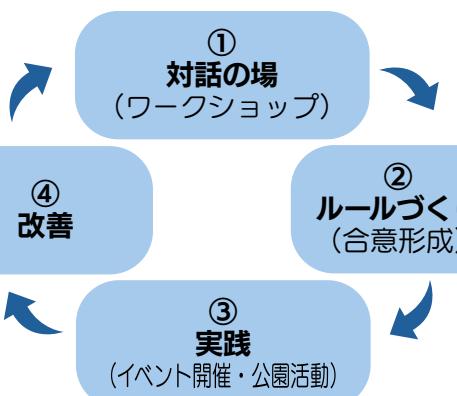


図 4-23 公園の使い方が進化していく柔軟なプロセス

みどりの価値を学ぶ

みどりが持つ多面的な価値を「見える化」し、市民全体で共有・評価する仕組みを構築することが大切です。

みどりの現状把握とモニタリング

グリーンインフラの実態調査や、市民が参加する生き物調査を通じてみどりの現状を正確に把握することは、科学的根拠に基づいた計画策定に活かされます。また、市民アンケート調査を実施することは、みどりに対する市民のニーズや満足度を把握することに役立ちます。



朝霞生き物マップ

みどりの多面的なチカラの評価と普及啓発

みどりが持つ様々なはたらきを「見える化」して共有する仕組みを構築し、その価値を広く普及啓発することができると、市民や事業者が自ら進んでみどりを守り育てる活動が促進されます。

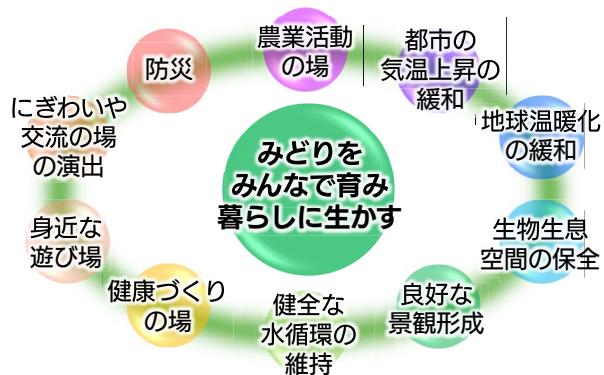


図 4-24 みどりが持つ様々なはたらき

3 あさかのみどりの魅力を楽しむ指針（グリーンプロモーション指針）

本計画では、みどりを「ただ守るもの」としてだけでなく、市民一人ひとりが楽しみ、参加し、そして一緒に新しいものを作り出すような「暮らしや文化の中で育まれるもの」として位置づけています。

この指針は、「みどりの魅力を見つけよう」、「暮らしにみどりを取り入れよう」、「共にみどりを育て未来につなげよう」のみどりのある暮らしを楽しむ3つの柱を通じて、みどりがもたらす多面的な恵みを分かち合い、次世代へと続く持続可能な暮らし方を提案するものです。

みどりの魅力を
見つけよう



暮らしにみどりを
取り入れよう



共にみどりを育て
未来につなげよう

図 4-25 みどりのある暮らしを楽しむ3つの柱

みどりの魅力を見つけよう

市民の皆さん、イベントや情報発信を通してみどりが持つ様々な価値や魅力を知り、みどりへの興味が深まると、日々の生活にみどりを取り入れることにつながります。

体験を通じたみどりの魅力発見

公園や樹林地、水辺空間などを最大限に活用することで、五感でみどりに触れられる質の高いイベントが開催できます。季節の祭りやアート、健康づくりなど、多様なテーマと連携することで、これまでみどりに関心のなかった層にも魅力が伝わります、体験することは、知識を超えた深い理解と愛着を生む第一歩です。



里山活動体験



ウォーキングイベント



田植え体験



パーク・ヨガ

情報でみどりとつながる

ウェブサイトやSNS、地域の広報媒体など、多様な手段を活用して、みどりに関する情報が発信される際には、イベントの告知だけでなく、みどりの豆知識や季節の見どころ、市民活動の紹介など、日常的に楽しめるコンテンツを充実させることで、情報の受け手である市民が、次なる発信者となるような情報の循環が生まれることが期待されます。



SNSによるみどりの情報発信

暮らしにみどりを取り入れよう

市民一人ひとりが、自らのライフスタイルに合わせて気軽に参加できる活動メニューが充実すると、活動の輪が広がり、「みどりのある暮らし」が特別なものではなく、日常の風景として根付くことにつながります。

日常にあるみどりの楽しみ

家庭でのガーデニングや菜園づくり、地場産野菜の購入といった「食」を通じた関わり、公園での散歩や体操といった「健康」への意識など、一人ひとりが日常生活の中でみどりを楽しみ、生かす視点をもつことが大切です。特別なことではなく、日々の小さな実践の積み重ねが、心身の豊かさとまち全体のみどりを増やすことにつながるという意識を育みます。



暮らしの中のみどりの活動

コミュニティで支えるみどり

活動に必要な知識や技術を学ぶ講習会や団体間の交流は、公園サポートや里山ボランティアなど、地域のみどりを市民が主体的に守り育てる活動の質と継続力を高めることになります。個人の「好き」という気持ちが、地域を良くする「力」へとつながり、活動を通じて新たなコミュニティが生まれることが目標です。



共にみどりを育て未来につなげよう

行政、市民、事業者がそれぞれの役割を果しながら連携することは、新たなみどりの価値を共に創造する「共創」につながります。

個人のみどりをまちの宝へ

大学のキャンパスや寺社の境内など、民有地にある貴重なみどり空間を、所有者、地域住民、行政が連携し、地域の財産として公開・活用することは、新たな交流拠点や景観資源を創出します。

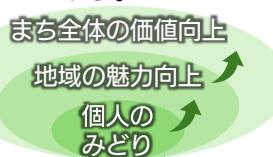
個人のみどりが地域の価値を高め、ひいてはまちの魅力向上につながるという好循環が生まれます。



境内地におけるイベント風景

個人のみどりが育ちまち全体の価値の向上へ

個人のみどりは、地域の魅力となり、さらにはまち全体の価値を高めていくような可能性を持っています。



みどりの価値の波及効果

